

## 音楽と私

里中忍

「あなたの趣味は？」と聞かれた時、私は即座に「スポーツと音楽鑑賞」と答えます。この二つはポピュラーな趣味ですが、スポーツは別として、音楽はビートルズ、ベートーヴェン、モーツァルトが好きです。そんな私も、小さい頃から音楽が好きだった訳ではありません。音痴の父を持つ私は、父の血を引き継いだのか、子供の頃から音楽を大の苦手としました。両親は自分の子供だから音楽が理解できないのも無理ないとあきらめていたようでしたし、私自身、音楽の時間さえなかったら、学校も楽しい所だと思えました。そのせいか小さい頃の音楽の思い出で楽しいことは、ほとんどありません。今でもはっきり憶えているのが、中学3年の時のことです。土曜日の2時間目だったことも忘れていません。黒板の前では先生が何やら一生懸命説明していましたが、面白くないので隣の友人と外の様子を見て話をしていました。その時、「そこで笑っている者！前へ出て来い！」と先生が怒鳴りました。最初は誰だろうと思って見回すと、みんなの顔が私の方を向いているではありませんか。しまったと思った時は後のまつり。この先生はよく殴ることで有名で、殴られることは覚悟していました。仕方なく立ちあがって前へ出るのをしぶっていると、「殴られるのがいやなら、出て行け！」と言われ、音楽で殴られるよりは出て行った方がいいと思い、教室から出て行ったことを憶えています。そして、この事件以来、音楽がますますいやになったようです。義務教育を終え、高専に進んだ私は、音楽で苦しむこともなくなり、ホッとしました。と言うのも、音楽の時間は1年間だけ週に1回で、しかも先生が女性で、眠たい人は寝ていてもよいということでしたので、いつも睡眠の時間と決めていました。

音楽と私の出会いは、大学にはいつからでした。大学では4月、5月ごろになると、サークルの資金集めにダンスパーティーが盛んに行われていましたし、大部分の学生はその頃ダンスパーティーでダンスを体得していたようでした。当時、私はあるサークルに所属して自分の可能性を試していましたので、ダンスはもっての外だと決めて無関心だったようです。それがどういう訳か、ダンスをやってみようという気になりました。今から考えてみると、たぶん大学生活に慣れたことと、サークルの中でもダンスがかなり流行していたことによるようです。その気にはなったものの、ダンスのダの字も知らない私ですから、1人勇ましくという訳にはいきません。最初は先輩に連れて行ってもらい、現場で特訓を受けました。これまでの音楽の嫌いだった私が、すぐに踊れる訳がありません。それでも、一応リズムだけはマスターできたように思いました。そこで、特訓の成果を試すために行動に移りました。その結果は言うまでもなく、みじめなものでした。女性をリードするどころか、自分のステップを音楽にあわせるのに必死で、その時の女性の容姿、スタイル等は、全然憶えていませんでした。しかし、その中でただ一つだけ憶えていたことがあります。それはその時に演奏された音楽で、ビートルズの「アンド・アイ・ラブ・ハー」でした。それ以来、私はビートルズの音楽に興味をおぼえ、レコード店とか、映画館に通い始めました。ビートルズも今ではもう解散してしまいましたが、彼等の音楽に含まれている独特のメロディーと詩が、私の琴線に共鳴したのでしょう。単純なこと、ありきたりのことをすばらしいメロディーと詩で表現する音楽がすばらしい芸術であることを悟ると同時に、なぜ今まで好きにな

れなかったのか後悔しました。ところで、ダンスの方は最初の失敗以来、やっていませんでしたが、音楽に興味を持ったことで、自信を取り戻し、とうとう踊れるようになりました。私にとって、音楽が何であったのかが、その頃ようやくわかりました。少年時代は音符どおりに歌うことが音楽だったような気がします。このこと自体、教育上悪いことでもなく、むしろ正しいことだと思います。しかし当時の私には、音楽は歌唱のテクニックであり、音符どおり歌う基本は重要でないと思えました。このような考えが、私を音楽から遠ざけたようです。今では、小さい頃の音楽のイメージは、すっかりぬぐい去られ、音楽を自分の物として楽しんでいます。

クラシックに目を向けるようになったのも、大学のはじめの頃でした。これもあるきっかけで聞くようになったのですが、今の私の好きな作曲家は、モーツァルトとベートーヴェンです。モーツァルトは3才の時からピアノを叩き、6才にはもうロンドンとかウィーンで演奏してまわったそうです。私はベートーヴェンの音楽を人間の能力の限界で作上げた作品とすると、モーツァルトの音楽はコンピューターで作った作品のような気がします。緻密で繊細なモーツァルトの作品は、とてもスマートであり、情熱や悲哀といった心の状態を表現するにしても、計算されていて、いわば理性というフィルターにかけてから楽譜となっているような気がします。そのせいか、彼の音楽は非常に美しいメロディーで、しかもきらびやかですが、ベートーヴェンで感じられる人間臭さがありません。音楽自体が完全な作品となっているために、聞いた時はすばらしいの一言につきると思

います。一方、ベートーヴェンは、「運命」と言えば「ベートーヴェン」、「ベートーヴェン」と言えば「運命」とあまりに有名ですが、ベートーヴェンの音楽には何かしら情熱が秘められているような気がします。春のうららかな田園に小川が流れ、小鳥たちが飛び交うような「田園」、愛に悩む若者が月光の下でピアノを奏でているような「月光」など、どれを取ってもすばらしいものばかりです。私はどの曲がどこで、どのようにして作曲されたか詳しく知りませんが、自分の置かれた境遇で精いっぱい生き、それを音楽に表現しているように思います。これは、現代に生きる私達にもあてはまるのではないのでしょうか。また音楽家にとって、耳の聞こえない致命的なハンディキャップを背負っても、それを克服した情熱は彼の音楽から感じ取ることができます。彼の音楽には、情熱の他に、苦しみ悩み、そしてそれを克服しようとする姿勢も伺われます。ちょうど、研究している私達の姿のようです。誰もが研究している時、壁に突きあたり、苦しみ悩みますが、その壁を突き破った時のうれしさ、喜びはあの第九交響曲です。壁が厚ければ厚い程、喜びは大きく、思わず Oh Freude! と叫びたくなります。人間は不思議なもので、壁を打ち破った時、それまでの苦労は忘れて、打ち破ったことの喜びしか記憶していません。こんな喜びがあるから、私達は苦しみ、悩みながら生きるのではないのでしょうか。音楽を知ってから、まだ間もない私ですが、私にとって音楽はなくてはならないものです。うれしい時はそれをかみしめ、悲しい時、苦しい時は慰めながら、生きる喜びを求めて行く私です。